
UNKNOWN BLADE

響 航流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UNKNOWN BLADE

【Nコード】

N2758Z

【作者名】

響 航流

【あらすじ】

これは主人公が目指すもの、それぞれの人間が目指すものを描いた物語です。

ここには剣も、魔法も妖精もドラゴンもない。そこにあるのは決められた運命と超能力だけだ。たどり着く場所は違っててもやることは同じ。これは愛と革命の物語です。

狂う前の物語（前書き）

稚拙な文章ですががんばります！

狂う前の物語

ピピピピピピピピ・・・・・・

朝。

目覚まし時計の不快な音に目が覚めた。

カーテンの隙間から朝特有の眩しい太陽光が注がれる。

（眩しい・・・・・・）

そんな当たり前の事を思いつつ、ベッドからはい出る。

学生にとって学校の平常授業なんて苦痛でしかない。もちろん俺の学校も今日は普通の授業だ。

立ち込める憂鬱感をなぎ払い、適当に着替えを済ますと、1階に降りる。

リビングの椅子に座ると、朝食を作る母親の背中が「おはよう」と使い古された挨拶。

その言葉を聞くと、『ああ、今日も昨日と同じ日常なんだな・・・』

』と、そう思う。

朝食をモム MOM とほおぼる間に自己紹介でもしよう。

俺の名前は水城 みずしろ 御鷹 みたか。

高校3年生。

趣味は特にナシ。

特技も特にナシ。

さつきまでの光景を見てわかるとは思いが、ただの一般人である。今までも変わった経歴はナシ。

強いて言うなら、俺には父親がいない。

そして不登校の弟がいる。

ただそれだけ。

十分変わっている気もするが、それらが俺自身に何か影響を及ぼすことはない。

ああ。

あと、隣の家には幼馴染の女がいる。

お互い部屋がすぐ真ん前にあるため、時々ソイツが俺の部屋にやってくる（窓から）。

『それだけで十分お前は特別なやつだ。フラグ立てまくりじゃねえか』と友人Aに言われたこともあるが、それに慣れている俺自身にはその特別さは理解できない。

すでに俺に『イラッ』とか思った人もいるかもしれないが、我慢してください。

朝食を済ませ家を出る。

普通だ。ここまでは。

家から学校までは、徒歩3時間

殺す気が。

もちろんバス通学だ。

バス停までは徒歩5分程度なのでわざわざ自転車は使わない。

俺は、『普通』という言葉が嫌いだ。

高校生にもなつてまだ非現実には巻き込まれるという夢を見ている、というわけじゃない。

とにかく、新しい環境が欲しい。

自分の退屈な人生を変えてくれる、環境が。

要するに退屈が嫌いなわけだ。

どんな人間だってそう思うはずだ。きつと。

一般的人間の俺が言ってるんだからそうに違いない。

徒歩5分。駅に到着した。

そこにはうちの学校の制服を着た奴がいた。

それこそが先ほど話した、『幼馴染』というやつなのだ。

彼女の名前は榊ひかり雛姫ひなぎ

「おっ、みーくん！元氣してたかな？ちなみに私は元氣してなか

「ったよ」

「嘘つけ！バリバリ元気だろ！」

「元気してたかって・・・、昨日会っただろ。みーくんはやめろ」

「そーだったそーだった！えへへ」

このテンションに毎朝付き合わされてるわけだ。

これから始まる“普通”の学園生活に対する憂鬱感もすこしは晴れる。

「もー！遅いよー。バスいつこ行っちゃったじゃん！」

俺はこの言葉に、

「先に行けばよかったのに・・・」

なんてイジワルを投げかける。

この言葉を今まで何度コイツに言ってきたことか。

こういうとき、こいつは決まってこう言うんだ。

「だって、つまんないじゃん」と。

多分バスの中で話し相手がいなくなる、と言いたいのだろう。

その気持ちはわかる。

それこそ、“退屈”だ。

「・・・・・・あ。ホラ。バス来たぜ。行こう」

「うん・・・」

そうして俺たちはバスへ乗り込む。

バスは“変わらない日常”へ向けて、走り出した。

到着。

ちなみにバスの中はほとんど無言だった。

雛姫ひなぎも弟が不登校であることは知っているが、深くは聞こうとしない。

気を使っているのだろう。

今のアイツはそもそも部屋から出てこない。

ここ数ヶ月顔も見えない気がする。

「学校ってどう思う?」

「唐突にそんな事を聞かれる。」

「どうって……どうだよ……」

「いや、楽しいーとかめんどくさいーとかさー」

漠然としてるなあ……

「んー……。楽しい……。楽しい、し、めんどくさい。かな
」？」

「それさつき私が言ったやつじゃん……」

「いやそうだけどさ、それ以外になんかあるか？」

「『愉快だ』！」

「『楽しい』の言い方変えたただけだろ」

いつも通りの適当な会話。深そうで深くない、普通の会話だ。

時間にはまだ余裕がある。

校舎に入ろうとしたそのとき。

何か、とてつもない違和感を感じ、立ち止まる。

そこには一人の女の子がいた。

制服のデザインが少し違うので、おそらく中等部の子だ。

髪型は……ツインテール？……ちよっと違うな。

どちらかと言うとおさげに近い気がする。

今の時代にしては珍しいとは思うが、それ自体は大して気に留め
ない。

しかし、

その子は、髪の毛が金色だったのだ。

(金髪って本当にいたんだな……)

なんて率直な感想しか思い浮かばなかったが。

「どしたの、みーくん？」

「……いや。なんでもない。みーくんはやめる」

そして俺たちは教室へと向かった。

教室ではすでに来ていた早寝早起きの生徒たちがざわざわと話していた。

いつもこんな感じだが、今日はいつもに増して騒然としている。

「おい水城ー！昨日のアレ、一体なんだったんだろうな!？」

俺が自分の机にバッグをかけた瞬間に、友人が話しかけてきた。

こいつは秋瀬燦汰。あきせ さんた

12月後半に大活躍してそうだがクリスマスは予定はナシ、とのことだ。

「アレ……?……ごめん、思い当たる節がない」

「ハア?昨日の“音”だよ!ホラ!夜中にすっげー爆音みたいな
のしたじゃん!!」

「……?」

首をかしげる。一切思い当たらない。

「まさかお前……あの音で目が覚めなかったのか……?
」

「まあ、多分そうだろうな」

秋瀬は2秒ほど口をあんぐりと開けていた。

「どんだけ深い眠りについてたんだよ……」

「さあな……で、その爆音つてのは?なにがあっただけだ?」

そう投げかけると、自信満々の笑みでこつちを睨んだ。

「ほんとはまあ、警察くらいしか知らないんだけどよ……なん

と!新聞部部长であるこの俺が情報入手してしまいました!!!」

「お前新聞部だったんだ……」

「今更?!？」

「まあいいけど。で、その情報つてのは?」

秋瀬はその後も『僕らの友情を切り裂く一言をサラッと流された・

・』とかぼやいてたが、気にしない気にしない。

「いいか……?聞いて驚け!なんと!この続きはCMの後we
bで!!!」

いらつ。

「いいから話せよ友達やめるぞ」

「ゴメンナサイ」

「で、え〜・・・、犯人が捕まる、もしくは、事件がしばらく起
こらなかつたら、また学校再開だからな〜。お前らももう受験生だ。
決して気は抜かないようにな〜」

俺は窓の外を眺める。

・・・。

まあ、これくらいの刺激はあってもいいよな・・・？

こんな事めつたに起こらないぜ。

なにせこの世界は平和すぎる。

たまにはこんなスリルがあってもいいと思う。

ま、どちらにせよ俺たちの人生なんてずっと普通の
。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ン・・・・・・・・！！！！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

一瞬、本当になにが起こったかわからなかった。

人間の脳の処理能力はすごいものだ。

たかが0.5秒ほどで、理解できた。

窓の外、少し離れた中等部校舎で

大爆発が起きていた。

きつとこの日から何もかもが狂っていったんだ。

俺たちの日常も、この世界も。

少年はヒーローになる

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン・・・・・・・・！！！！！！

なんかすげー爆発が起きた・

「・・・・・・・・っ!？」

教室内はざわつく。

教師含むクラスメイト全員が窓際から外を見た。

爆炎が空へ昇っていく。

中等部に弟や妹がいる生徒は特に心配そうな目で見ていた。

「なんなんだよ・・・・。これ・・・・・・・・。」

自然と口から零れる言葉。

俺自身も非現実には酔いしれる余裕がなかった。

次はこっちが爆破される可能性だつてある。

「先生ッ！俺たちも避難したほうが」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！！！！！！！！！！！！！！！！

まただ。

また爆発が起きた。

今度はどこだ！？ 音はかなり近かった。

窓から外を見る。

すると、4つ隣の教室、3-Aから火の手が上がっていた。

そして同様に1-A、2-Aも爆破されていた。

ということは・・・・・・・・次は・・・・・・・・。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオン！！！！！！！！！！！！！！

分かる。

次に爆破されたのは1-B、2-B、3-Bだ。

「……っ！生徒全員外へ避難しろ！！」

教師が叫ぶ。

この状況で全員冷静に逃げられるわけがない。

生徒たちは我よ我よと廊下へ走る。

俺は他の生徒たちに押されてなかなか外にでられない。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオン！！！！

やばいッ！次はC組だ！！

爆風に廊下に出ていた生徒たちは押し倒される。

このままじゃ全員逃げ切れない……！？

人の群れは立ち上がり、階段へと走る。

各クラスの爆破には3分近くの空きがあった。

クラスメイトたちは大体出ていき、ようやく俺も教室外へ連れ

そつだ。

しかしこのまま逃げるとD組爆破の巻き添えになるので、ここは冷静にD組爆破を待つ。

クラスには数人しか残っていない。

この数人は賢いのか、むやみに室外へ出ようとする者はいない。

その“数人”のなかには、幼馴染の雛姫もいた。

しかし雛姫だけは様子がおかしい。

地面にペタンと座り込んでいる。

「……どうした！？」

「う……うう……、足……くじいたかも……」

思考回路が一瞬吹っ飛ぶ。

じゃあどうやってここから逃げる。

置いていくか？

見捨てるか？

無視するか？

「……どうしても、『おぶって一緒に逃げる』という選択肢が出てこない。

人間って……弱い生き物だな……。

「ヒナっ！大丈夫!？」

雛姫の親友の月島つきしま夜見よみが雛姫のもとへ駆け寄る。

「え……あはは……、足くじいちゃった……。」

「あはは……って……。」

月島も動揺していた。

多分、月島も見捨てる選択肢しかないだろう……。

俺と同じ、ふつうの人間なんだから。

「……わかった！わたしの背中につかまって……！」
「……は？」

何言っただよこいつ……。

「だめだよ……夜見ちゃん……が逃げ遅れちゃう……！」

「！」

「大丈夫だよ！なんとかなるって……!!」

「ならないよ！」

そんな会話を聞いてたら。

なんか俺ってみつともないな……。

と、そう思えてきた。

自分の事ばかり考えて、他人を引きずり下ろしてでも自分だけ助かろうなんて……。

人間としてはそれで普通なんだろうけど。

俺も一度くらい、子供の頃憧れてた“ヒーロー”ってやつに、なってみたかった。

「雛姫……！俺の背中に乗れ!!」

言っちゃった!

言っちゃったぞチクショー!!!

「でも……」

「『でも……』じゃねえ! こちとら男だぜ!!! 男の体力舐

めんなって!!」

「いや……でも……」

「いいから乗れ!!」

雛姫はキョトンとしていたが、少し安心した表情に変わった。

「……うん」

「よっし!」

雛姫は俺の背中にしっかりと捕まる。

その瞬間、

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオン!!!!!!!!!!!!!!

D組が爆破された。

タイムリミットはあと3分。

下手をすれば廊下にまで被害が及ぶだろう。

1階まで逃げ切れれば窓から逃げられる。

だから、3分以内に1階まで逃げ切れて話だ。

「……ッ! やってやるぜチクショー!!!」

そう言って俺達は教室から飛び出した。

少年はヒーローになる（後書き）

いまだにSFっぽさが出ていませんが、しばらくすると出てくると思います。

踏み入れた少年

俺は雛姫を背に乗せ、廊下へ飛び出る。

案の定、3階は全体的に火の海だ。

クソッ！ 時代遅れの木造校舎め！！ なにが『おもむき趣ある校風』だ

よ！ 恨むぜ理事長！

転ばないように慎重かつスピーディーに階段をかけ降りる。

途中でコケそうになったが、なんとか持ち直した。

「……………っ!？」

3階と2階の踊り場を曲がると、熱で顔が溶けそうになる。

「チイツ……………、ここも火の海かよ……………」

2階には火の手が上がっていた。

「みーくん……………。大丈夫……………?」

心配そうな目で見つめる雛姫。

「どーすんだよ……………コレ……………。そしてみーくんはやめろ

っ……………!」

「下がってて!!!」

俺が立ち止まっていると、後ろからの月島の声。思わず振り向く。

月島はどこからか消火器を持ってきていた。

「ナイスだぜ月島!!!」

「ご褒美は弾んでくれよっ!!!」

そう言つと月島は炎の壁に突っ込み、一気に消火。

こういつときの手際はとてもいい。

「ほらっ、急げ!時間がない!」

「あ、ああ……………」

一気に2階へ降りる。

階段のコーナーを曲がったときに、違和感。

「月島……………これは、マズイかもしれない」

消火器を投げ捨てた月島は、なんで?、と問う。

「俺の気のせいじゃなければよ．．．階段まで燃えてるんだ．．．」

「え．．．．．？」

「残り時間は！？」

月島はポケットから携帯電話を取り出し、時刻を確認した。

「．．．つて、時刻確認しても意味ないし！！」

こんな時にボケられても困る。

「ん．．．あと2分くらいだと．．．．．」

「くっ．．．．．」

これは本当にまずい。

消火器ももうないだろう。

何か火を消せるもの。何か火を消せるもの．．．．．

うん。

無いな。

諦めるのは嫌だが、もう打つ手がない。

階段へ逃げようにも、3階からも火で上にも下にも行けない。

このままだとE組爆破に巻き込まれるだけだ．．．．

どうするよ俺。

困った俺は月島の方を見る。

俺って、本当に弱いんだな．．．。

月島は下唇を噛み締めてうつむいていた。

「夜見ちゃん．．．？」

月島は深く何かを考えるようにして、そして何かを決心したかのように顔を上げる。

「二人とも．．．目．．．閉じてて．．．」

「．．．．？」

なにが起こるかはわからないが目を閉じる。

目を閉じると、温度だけが伝わってきてさらなる恐怖だ。

俺は恐怖心に耐え切れず、うつすらと目を開ける。

そこに信じられない物、触れてはいけない物があるとも知らず、目を開けた。

月島の左の手のひらには、魔方陣に似た光が集まっていた。薄く光る陣に、月島は右手を入れる。

入れた先には月島の手はない。あの陣はどこへ繋がってるんだ？月島が右手を引き抜くと、そこには消火器が握られていた。

(なん・・・なんだよコレ・・・どうなってんだ・・・?)
月島は同じ動作を何度か繰り返す。

そして消化器を5本ほど取り出すと、こちらを向いた。とっさに目を閉じる俺。

「目・・・開けていいよ」

もう一度目を開く。

夢じゃない。

たしかにそこには消化器が5本、転がっていた。

「これ・・・どうやって・・・?」

「そんなことどうでもいいだろ?」

そう言いながら月島は淡々と消火作業をする。

どうでもいいって・・・、かなり良くない気がするが。

「まあとりあえず道は開けたから、はやく逃げよう」

月島はそう言い、走り去った。

「・・・・・・・・・・。俺も急ごう・・・」

無事校舎から出られた。

「ゼエ・・・はあ・・・ごほっげほっ・・・！死ぬかと思
った・・・！」

実際死にかけてたしな。

「君たち・・・大丈夫かい・・・！？
消防の人が話しかけてくる。」

これが大丈夫に見えるのかよ・・・。

「だいっ・・・じょーぶで・・・す・・・
それでも正直には言えない俺だった。」

「それでもよ……E組は爆破されないな……」
「そーだね……」

もう脱出してから5分近く経っている。
なぜ、爆破されなかったのだろうか……？

しばらくすると、校長が自宅退避を言い渡した。

みんな複雑な表情で帰路につく。

中には避難しきれなかったA組の全員とB組、C組の数名の名前を叫ぶ者もいた。

「……雛姫。俺たちも帰るか……」

「……うん」

徒歩で駅へ向かう。

歩く先には、なぜか月島がこっちを向いていた。

人ごみにまぎれていたせいか、雛姫はその姿に気づかない。

歩を進めるうちに月島とすれ違う。

特に何も言わずにすれ違おうとした。

だが、月島はそうでもないらしい。

二人きりで話したい事がある。

そう、俺の耳元で囁いた。

咄嗟に振り向く。そこには歩き去っていく月島の姿が見えた。

「……っ！ すまん……先に一人で帰ってくれ……」

！

「うえ！？……どして……」

「忘れ物をしたっぽい！！」

そんな適当な言い訳でごまかすと、俺は月島のあとを追った。

少なくとも愛の告白でないことはたしかに分かっていた。

それがいい話じゃないことだって、きつとわかってたはずだ。

それでも俺は追いかけた。

きつとその先に俺の求めていた非日常が訪れるのではないかと、

期待してたから。

迂闊にも

、踏み入れてしまったのだ。

踏み入れた少年（後書き）

やっと超能力っぽい場面を見せられました。
なんか楽しくなってきた……！

その少女、七瀬 愛理

「……見たでしょ」

俺は月島について行き、小さい路地に着くなりそう聞かれた。

「見……た……っ……って？……何を？」

なんとなく予想はついたが、全力でシラを切ります。

ハイ。

なんか、本当に惨めだな俺……。

「水城だつて、大体予想はついてるんだろー？ 私がなんのこと

話してるか、さ」

「……いや、さつぱり」

意地でもシラを切る。切って切って切りとおしてやる。

「チツ……。話にならん……」

イジけた風に舌打ちすると、月島は後ろを向いた。

「……なあ、なんなんだよ一体。その“見た”ってのは……」

シラを切りながらあわよくば聞き出してやるう、という魂胆である。

しかしその質問をすると睨まれた。

月島は小さくため息。

そしてまた睨む。

ダンッ！！！！

「……っ……」

月島は、俺のネクタイを鷲掴みにして俺の背中を壁に押し当てるように顔を近づける。

「じゃあ質問を変える。水城は私が“目を開けるな”と言ったとき、目を開けたか？」

……。

その質問は卑怯だろ……。

雛姫は呼ばれず、俺は呼ばれた。

つまりこいつには、バレてる。

さすがに逃げ切れんか……。

「…………ごめん。開け

」

「それ以上の暴行はやめてください」

突然知らない女の子が割り込んできた。

しかしこの子、どこかで見たことが……。

いや、深く印象に残ってる。

「水城^{みずしろ}、この子友達？」

「いや、知らない子だけど……。」

「ふむ……。」

乱入したその子は、ネクタイをつかんだ月島の腕をしつかりと掴んでいる。

おまけに、金髪である。

今朝見た子だ。

「それ以上の一般人への暴力は、光星学園中等部風紀委員長であるこの私が許しません」

「中等部……ねえ。どーりで身長が低いわけで……。」

「平和秩序を乱す者に年齢も身長も関係ないです。それにあなただって、大して変わらないじゃないですか」

皮肉った月島の言葉を軽くあしらうその子は、とてもかっこよかった。

「まあそうだけど……。悪いけど私はこのお兄さんにちょっと用があるだけなんだよー」

「私にはただの尋問にしか見えませんが……？」

「よかつたね。拷問じゃなくて」

「茶化さないでください」

ここまで来ると、さすがに月島も少し困った表情。

それでも俺のネクタイは離そうとはしないのな……。

「とにかく、それ以上の暴力行為は許しませんからね・・・」
その子は1度まばたきをすると、月島をしつかりと見て、続ける。

「SHIFT 1超能力者、月島 夜見さん」

その一言、月島の全身に悪感おかんが走る。

ネクタイをキツく締めていた腕が、するりと解け落ちる。

「ははは・・・、参ったな・・・。。。。。。君、何者？」

月島の手を離れたその子は、指を口元に添え、考えるような仕草をし、答える。

「光星学園中等部風紀委員、七瀬ななせ 愛理あいりと申します」

その子はさっきまでとは裏腹に可愛らしく、そう言った。

その少女、七瀬 愛理（後書き）

とうとうパツキン登場です。

でも実際日本に金髪の中学生なんているんですかね？

そもそも中学に風紀委員なんてありましたっけ？

始まり

「 つ。超能力者つてのは正解。でもさ、SHIFT
1つてなんのこと？」

「それにはお答えしかねます」

「……………」

超能力者……。

まさかそんな……。

心の整理がうまくできない。

そんなもの信じられるかよ。

でも俺は実際見ている。

でもあれは、どちらかと言うと魔法に近かった気もする。

にらみ合う月島と七瀬さん。

「なあ、超能力つて一体なんなんだよ……………」

俺はその質問を月島にしたのか、それとも七瀬さんにしたのかはわからない。

質問に答えたのは七瀬さんだった。

「さっきの会話を聞く限り、あなたも当事者の一人でしょう。中途半端に知って言いふらされるのも面倒ですので、その質問にはお答えします」

前置きが長いな。

「超能力とは……………、そのままの意味です……………」

前置きの割に本文は短いな。

「そーじゃなくって、もっと、こう、なんというか……………」

「言いたいことは分かります。しかし私たちだってよくわからないんです」

と、七瀬さんが言う。

「その割にはなんか色々知ってそうな事言っただけだな」

と、月島が皮肉たっぷり返す。

「少なくともあなたよりは知ってます。よく知りませレずこんな例イ外項目を扱レうわけにもいきませんので」

なんだよこの皮肉合戦。

「まあ、こんなところであなたと言レい争レっている暇はありません」

「私たちが暇人だレって言レいたいのー？」

「『私たちが』って……俺も入レつてんのかよ……」

「いえ、私には今回の件についての調査がありますので」

今回の件……？

学校爆破の件か。

「この事件について、現在警察が調査を進めています。しかしどうもおかしな点があるんですよ」

「おかしな点……とは？」

「爆発物が、見つかってないんですよ。どの教室でも。もちろん、爆破される予定だったE組でも」

……？

「つまり、それが超能力者の仕業ってわけ？」

「ご明察です。あなた方にはそれに協力していただきたい。」

はあ……？

「『あなた方』って……俺も入レつてんのかよ……」

「当然です。あなただレって、関係者でしょう？相手は超能力者です。ので、あまり無茶な協力はさせません」

「なあ、その、『あなた』ってレいう呼び方をやめてくれないか？

七瀬さん」

そう頼むと、七瀬さんは透き通った瞳で俺の顔をじっとみつめる。

「それでは、水城御鷹さん。それと、年上に『さん』を付けられると気持ち悪いので呼び捨てでいいです」

フルネームかよ……。

てか、気持ち悪いって……。

気にはなレったがそれ以上はあえて何も言レわなかった。

今日の災難、明日の寢床

翌日。

「えー……。というわけで、ただいまより第一回犯人だーれだ議論大会始めたいと思いまーす。はい拍手ー」

パチパチパチ。

七瀬はご丁寧小さく拍手をした。月島は言うまでもなくノーアクション。

空気は読まないタイプなんだろう。

「月島、拍手」

「しない！」

「ノリ悪いなー……」

キツと睨む月島。

これ以上言々と俺の顔を挟んで拍手されそうなので、よしとおう。

「ああ、拍手なんて別にいくらやってあげてもいいんだよ？でも

ね……、」

「もったいぶるなよ。言いたいことは言っていていいぞ」

「じゃあ言わせてもらう。なんでこの会議私ん家で始まったの

！？」

「……」

「……」

「……」

「……」

七瀬と俺は沈黙し、月島の顔を眺める。

「俺だつて別にここでやりたかった訳じゃない」

「私がお願いしたんですよ」

七瀬はそう切り出した。

「男性の家に上がるのはどうかと……。私も風紀委員ですので

「一応」

「ぬ……。じゃあナナセさんのお宅でやればよかったじゃないですかよー……………」

なんか変な口調になってる。

「あなた方を家に入れると危険な気がしたので」

「あなた方って……………俺も入ってんのかよ」

「それはどういう意味だよー。荒らしたりしないよ?」

そうですね。なら、今後は検討します。

七瀬はそう言うと、携帯電話を取り出してカチャカチャとつつく。会話の途中でも平気で携帯、というのはやはり七瀬も現代人なんだな……………と悟る。

携帯電話を持ってきたバッグにしまうと、急に立ち上がった。そして拳動不審にあたりを見回す。

「どうしたの?」

月島が尋ねると。

「家宅搜索です」

七瀬がスパッと答えた。

「なんで!??されるのは嫌だって言ったクセにするのはいいの!」

「まずは味方の潔白を証明しないと捜査は進みませんよ」

「そのセリフ、ワクワクしながら言う言葉だっけ!?!」

七瀬はとても楽しそうな顔で部屋をキョロキョロと見た。

その後もどつたんばったんと楽しそうにはしゃいでいたが、そろそろ止めないと危ない。

「お前ら落ち着けよ……………家の方に迷惑かかるだろ……………」

「……………?そう言えば、この家には私たち以外の人の気配がしませんか」

「お前気配とか読めんの!??かっけー!」

「言葉の綾あやですよ」

俺たちは俺たちで騒いでいるが、月島1人ボーっと座っていた。

まるで別の考え事をしてるみたいに。

「…………どうした月島？」

「うえ？ああ……いや、なんでも」

「…………？」

そう言い、手を横に振る月島の顔は今にも泣きそうだった。

その理由なんて俺には分からない。

しかしここで理由を訊くのは野暮ってもんだ。

さらっと流すのが粹ってもんだらう。

「で、そう言って手を横に振る月島先輩はなんでそんなに今にも泣きそうな顔をしているんですか？」

野暮な奴はここにいた。

「オイ…………七」

七瀬の無礼を咎めようと発した言葉はすぐに遮られた。

「私、いないんだよ…………、両親」

月島はうつむいて、そう答えた。切ない顔で。

俺は七瀬の方を、半分睨むように、見る。

その顔は『無』だった。

特に何も思ってないような、そんな顔。

「私には弟も居るんだけど…………、病気で、ずっと病院」

小さな声でそう言った。

「そうか……………」

どうすんだよこの空気…………。

『犯人だーれだ』とか言うような空気じゃない。

シリアスなんだよ。

俺の家にも父親はいないけど、母親と弟がいる。

死んでないどころか弟に至ってはずっと部屋の中にいる。

だから寂しくない。きつと。

「……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰も喋らない。

帰りたい・・・・・・・・。

本当にどうすんだよこの空気・・・。

ここで『元気に仕切り直そう!!』とか言う奴がいたらそいつは間違いなく空気が読めない。

「そうですね。それは気の毒ですね。それでは、元気に仕切り直しましょう」

空気が読めない奴は、ここにいた。

予想通りの七瀬愛理である。

だがこれ以上空気が悪くなるのも困るので、便乗しておこう。

「そうだな。でも、犯人を見つけ手掛かりなんてあるのか?」

「ありません。あるんならとくに私一人でやってます」

「じゃあどうやって探すんだよー」

月島もようやく喋った。元気で何よりだ。

「わかりません。なので今日はお開きです」

「なんで集まったんだよ!?!」

まあ、もう夕方なので仕方ない。

そろそろ帰らないと母さんが仕事から帰ってくる時間だ。

「それでは各自、犯人を探す方法を考えておいてください」

「お前結構無茶な性格だなー・・・」

「はい」

というわけで。

というか、どういうわけか本日はお開きとなった。

「おじゃましましたー」

「おじゃましました」

俺と、それから空気を読まない野暮な七瀬は月島（の家）に挨拶をすると、玄関を出た。

特に交わす言葉もなく5歩ほど歩く。

「あ、水城御鷹先輩。ちよつとここで待っていてください」

「フルネームはやめてくれ」

そんな俺の切実な願いも聞き入れず、七瀬は月島の家に戻る。

忘れ物か・・・？

しかし、七瀬は玄関に入ると、扉がゆっくりと閉まった瞬間に出た。来た。

「お待ちせしました」

「忘れ物か？」

「いいえ、ちよつとしたイタズラを・・・」

意味ありげに微笑む。その“ちよつと”がどれくらいのものなのか。

うむ。こいつのやりたいことはさっぱり分からん。

「まあいいです。帰りましょう」

そう言い七瀬は俺の腕を引っ張る。

「帰りましょうって、お前ん家こつちなのか？」

七瀬は黙り込む。

急に俺の腕から手を離すと、俺の方を真正面から見て、言った。

「違いますよ。護衛です。いつ爆破が起こるか分からないんです

よ？」

そして、くるつと方向転換。俺の家がある方に向き、勝手に歩き始める。

「まあ、もう手遅れかも知れませんがね・・・？」

「お前が言うつと冗談に聞こえねー・・・」

本当に呆れたものだ。

俺は歩く七瀬の背中を追った。

冗談じゃない。

本当に、冗談じゃない。

俺はもっと用心しておくべきだったんだろうか。

いや、用心してどうにかなる問題でもなかった気がする。
俺は頭の中がぐちゃぐちゃに掻き回されるような感覚に陥る。
これを現実だと認識してしまうと何もかもが潰れてしまいそうで
「あーあ。これは派手にやっちゃいましたねー・・・」
隣の七瀬がまたも空気を読まずに喋りかける。
空気が読めないとか以前に、不謹慎が過ぎる。
現状を簡単に説明しよう。

俺の家が、燃えていた。

窓という窓からは黒い煙が空へと放たれ、距離を置いても顔がと
ても熱い。

「なん・・・で・・・・・・？」

誰に投げかけたのかも分からない質問に、七瀬は答える。

「爆破に巻き込まれたんでしょうね。お気の毒に」
少々カチンとくる言い方だったが、俺はそれどころじゃなかった。

俺はただただ、消防士たちが火を消すのを遠くから見ていること
しかできなかった。

「　　ッ！そうだ、秋雨あきは！？　ちゃんと逃げたのかよ！？」

「引きこもりの弟さんなら、私が逃がしましたよ。さっき。メー
ルで」

「・・・・・・ハア？　お前、なんであいつのこと知ってんだ？」

七瀬はそれでも、冷静に燃え盛る俺の家を見つめる。

「一応、クラスメイトですから」

七瀬は、単調に、淡々と、そう答えた。

今日の災難、明日の寢床（後書き）

今回は思いつきで主人公の家を燃やしました。

これが今後の展開に吉とでるか蛇が出るか・・・。

まあ、何もわからないって意味です。

今更ですが、感想や誤字・脱字などあればよろしくお願いします！

そして俺は事実を知る

俺は寢床に困ったのでクラスで一番親しい友人、秋瀬燦汰あきせ さんたの家で泊まらせてもらうことになった。

「お前も大変だなー・・・1週間で2度もあんな目にあうなんてよー」

リビングテーブルのソファに座る俺に、真正面に座る秋瀬は言った。

「まるで何者かに狙われてるみたいですねー」

と、なぜか俺の横には秋瀬の姉、秋瀬 まどかさん

ふつうこういう時って俺の正面側に座らないか？ なんて横・・・

秋瀬のお姉さんは物腰の柔らかい人で、長い髪の毛を後ろで縛っているところに生活感を感じる。

この人がまさか、秋瀬（燦汰のほう）と同じ両親から生まれたとは信じがたい。

対する秋瀬のほうは、騒ぐ 怒られる 喋り始める 騒ぐ 怒られる、をひたすら繰り返すような単細胞なのである。

「はは・・・。そうですね・・・。」

無理やり笑みを作り、そう答える。

「で、それはいいけどよ・・・。結局その弟はどうなったんだ？ いなくなっただら？」

「ああ。事件の後にはもう居なくなってた」

「見つかったらいつでも匿かくまってやるからな」

「ああ、うん。ありがとう・・・。」

俺は、差し出されたオレンジジュース（らしきもの）をグイッと飲む。しかしオレンジジュースにしては少しトロツとした舌触りがある。

「これ、なんのジュースですか？」

「見てのとおりオレンジジュースだろ？」

「お前に訊いてねえよ……。お前に訊いたんだったら敬語なんか使わん」

俺はまどかさんに訊いたつもりだった。

まどかさんはおっとりとしている。

「あの、まどかさん……。？」

まどかさんは、おっとりとしている。

「まどかさん……。聞いてますか？」

まどかさんは、おっとりとしてs（以下略

「姉貴。聞いてるか？」

秋瀬はまどかさんの肩を軽く揺さぶる。

「ん？あら、ごめんなさい。なんの話をしてたんだっけ？」

「いや、これ、何のジュースですかーって……」

「あら、美味しくなかつたですか？」

「いや、おいしかったです。はい」

「そのオレンジジュースは隠し味にハチミツとハチノコとプロテインをいれたんですよ」

「なるほど、どおりでドロツとザラツとして……。プロテイン！？」

なんで客人に出すジュースにプロテインが！？

俺にどうなって欲しいんだ！？

「あ……。あの……。なぜプロテインが……。？」

「え？男の子ってみんなプロテイン好きじゃないの？」

「あつ、姉貴！俺と他の奴を一緒にしないでくれ！！」

「お前日常的にプロテインを摂取してたの！？」

「へへっ。昔の話だ……」

照れくさそうに言うな。てかお前そんなに筋肉ないだろ。

「お前、プロテイン飲んだからって筋肉ムキムキになるわけじゃないぞ」

「そ、そうなのっ！？」

予想通り、案の定の反応だ。

にしても、変な家族だよ。コイツら。こんな綺麗な姉だけでも分けて欲しい。

「そういや、まどかさんってもう大学生ですよ？なんでここに？」

俺たちが高校3年だから、その姉はもう大学生のはずだ。

ひよつとすればもう社会人に出ているのかもしれないが、まどかさんはかなり若く見える。

むしろ高校生にすら見える。

「ちよつとこちらに用事があつて・・・それで」

「そつすか・・・」

特に気になつたわけでもないが、なんとなく質問しただけだった。なんか気まずいな・・・。

こんな仲のいい姉弟の中に混じるなんて・・・。

誰かこの空気をかき乱してくれー！！

ピンポーン

チャイムの音がした。

音の近さからして、この家だ。

「誰でしょう・・・？」

まどかさんが部屋から出ていき、見事に募っていた緊張感から開放される。

た、助かった・・・。

「お前のねーちゃん、美人だな・・・」

「あー、昔からモテたもんな・・・」

「まどかさんて、うちの高校だったっけ？」

「そうだぜ」

秋瀬とは高3になってから知り合つたので、姉のことは知らない。秋瀬自身の口からも聞いたことはなかった。

しばらくすると、玄関の方からパタパタとスリッパの音が近づく。リビングの扉が開くと、顔をだしたのはまどかさん。当然か……。

「誰だったのねーちゃん？」

「女の子。水城君に用事だつて」

お、俺？

「なんだろな……八八……」

大方、月島か七瀬あたりだと思うが……。

的中。

ドアの前にいたのは、月島だった。

「何の用だよ……」

月島の顔はいささか不機嫌そうだ。

「いや、昨日さ、私ん家から帰るとき、なんかした？」

「あ？いやなんも……。どうしたんだ……？」

そうだ、確か帰りに七瀬がイタズラしたとか言ってたような……。

「家のブレーカーが……、全部落ちた……」

……。

「……。陰湿な嫌がらせだなー……」

「部屋に戻ったら電気が消えててさー、で、そんなに電気使つてなかったからブレーカーでもないかなーと思って見てみたら、案の定ブレーカーだったよ……」

「大変だな……」

「で、水城の家に行ってみたら……、なんか焼け焦げてたしさー……。おまけに七瀬の家はわかんないしさー、とにかく大変だったわけよ」

……。

「なんつーか、災難だな・・・」

「てわけで七瀬に会ったら叱っておいてくれよー」

俺はあいつの保護者かよ。

「わかったよ・・・」

「じゃ、用はそれだけだから」

月島はおとなしく帰った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。なんだったんだよ・・・・・・・・一体・・・」

ドアがゆっくりと締まるのを見届けると、俺はリビングに戻

ピンポーン

れなかった。

「今度はなんだよッ・・・・・・・・!!」

他人の家だということもすっかり忘れ、ドアをガチャリと開ける。

「こんにちは水城御鷹先輩」

そこに立っていたのは、七瀬だった。

「何の用だ・・・・・・・・?」

「昨日、月島先輩の家のブレイカーを全部落とした件について謝罪しようと思ったので、月島先輩に会ったら謝っておいてください」

「なんでお前ら俺に押し付けようとするんだよ!!七瀬は月島の家知ってるだろうが!!」

「ワカリマセー（棒読み）」

クソッ。『かつこぼうよみ』まで律儀に読みやがって・・・。

「・・・・・・・・。冗談ですよ・・・・。今日は別の用事で来たんです」

「・・・・・・・・なんだよ?」

「なんと」

七瀬は無駄に余韻をあける。

「犯人を特定しました」

「ボケてる場合じゃなかったよね！？そっちが大本命だよ！！」
なんか驚く場所が違う気もするが……、まあいつか！

「で、誰なんだよ……その犯人つてのは……！」

「先輩のよく知ってる人物ですよ……」

……？

よく知ってる人物、と言われてもパツと浮かばない。

「で！？誰なんだよ！！??」

「……それはあえて焦らします。まずは犯人の超能力についてです」

焦らしやがった！？

焦らしやがったよコイツ！！

「超能力とかもうぶつちやけどうでもいいよ！犯人教える！！」

「どんな名探偵だって、犯人より先に犯行方法について先に語るでしょ？」

名探偵気取りだよコイツ！！

「犯人の能力は、人工的な明かりを爆発させる能力」です」

「……超能力ってそんな大雑把なもんでいいのかよ……」

「だから犯人は大きな施設を集中的に狙った」

俺の率直な疑問を華麗にスルーしやがった七瀬は、名推理を披露し始めた。

「しかしその中には例外が二つありました。それがなんだか分かります？」

「1つは……、俺の家だよな……？」

「正解です。そしてもう一つが、月島先輩の家なんですよ」
何言つてんだよコイツ……。意味わからん。

「……ッ？はあ？爆破されてないじゃないか……」

「そうですね。されませんでした。私がブレーカーを全部落とすことによって、ね」

なるほど……。それならブレーカー事件と犯人の超能力にも辻褄があうな……。

「その“例外”の共通点。それは」

「……。俺がいた場所、つてわけか……。」

「正解です」

七瀬はおどけたように、手を鉄砲の形にして俺を撃つジエスチャ―をした。

「……。でもよ、それだとこの家も爆破されておかしくないんじゃないか？」

「ええ……。犯人も、自分のアジトは壊したくないでしょうね」

自分の……。アジト？

自分の家ってことか？

「え……。それってつまり、犯人は……。」

「その通りです。犯人は、先程からあなたの後ろにいる、秋瀬先輩ですよ」

え……？

後ろ……？

後ろを振り返る。

全身にゾクツと悪寒が走る。

そこには、気持悪い笑みを浮かべた、秋瀬 燦 汰がいた。

そして俺は事実を知る（後書き）

意外性を追求しました。
ただそれだけです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2758z/>

UNKNOWN BLADE

2011年12月19日02時51分発行